

群馬県藤岡市にある高山社は、1884 年から 1927 年までの間に運営された。

この学校は当時最新の養蚕方法を日本全国だけでなく、韓国や中国、台湾から訪れる人々に教えた。高山社は高山長五郎(1830-1886)という元侍で、1867 年に明治維新が始まった後、彼の先祖代々の家を養蚕場に変えた。長五郎は 6 年間、良い蚕の繭を収穫することができなかった。しかし、彼は様々な方法を試し続け、最終的には田島弥平の換気技術である「清温育」と、部屋の空気を暖めることに焦点を当てた福島県の「温暖育」の技術を組み合わせ成功を収めた。病気を防ぐために熱を注意深く調節する必要があったが、熱は蚕を早く成長させ、繭の生産時間を 50 日から 28 日に短縮した。長五郎は彼の新しい方法を 2 つの名前を組み合わせで「清温育」と呼び、学んだことを隣人たちと自由に分かち合った。彼の評判が上がると共に、日本全国から蚕農家が彼の元にアドバイスを求めた。これにより、長五郎は養蚕農場を公立学校に変えた。すぐに高山社は十分な生徒が入るスペースがなくなってしまったため、新しい建物と、いくつかの分校が建てられた。本校とは異なり、支部の学校は貧しい家庭が通うことを許可するために授業料を請求しなかった。何千人もの卒業生のうち、3,500 人が養蚕の教師になり、多くの都市の要請により日本各地を回り「清温育」の技術を教えた。高山社は、幅広い知識豊富な農家や教師を養成することによって、日本の絹産業の急速な拡大に貢献した。